

第34期小田原市図書館協議会第6回協議会 会議録

日 時：令和4年3月25日（金） 午後2時00分から午後4時00分まで

場 所：小田原市立中央図書館2階 研修室

1 あいさつ

文化部・鈴木部長

2 報告事項

（1）利用者からの意見・要望等について【資料1】

○事務局説明（資料に基づき図書館長より説明）

○質疑応答

武田委員：コロナ禍において、利用者の衛生観念がより敏感になっていると思うが、東口図書館で設置している本の消毒機は何割ぐらいの方が利用しているのか。

図書館長：利用状況については把握していないが、設置しているのは1台で、1回消毒するのに1～2分ぐらいかかるため、全ての方が利用されると長蛇の列になることが予想される。現在はそのような状況になっていないので、現状では気になる方が利用しているぐらいだと思われる。

武田委員：非常に高価な機器なので簡単に購入できるものではないと思うが、消毒機以外で図書に対して気を付けていることはあるか。

図書館長：基本的な感染対策として、閲覧席の間隔をある程度離す、衝立を置く、飲食スペースでの食事を遠慮していただく等の対応を取っているところであり、図書に対しての直接的な処理は行っていない。図書館の場合、常に会話をする場所ではないので、感染が広がってしまう恐れは低いと認識している。

飯村委員：利用者からの意見というのと、改善すべきという意見が多いが「いつもありがとう」といったコメントを寄せられると嬉しく感じられた。先日、テレビである大学図書館の特集を放送していたが、そこでは図書館は喋ってもいい場所として捉えていた。今までの図書館は静かにしなければいけない空間という概念があり、静かにしてほしいと思っている利用者もいることは承知しているが、これからの図書館は一部分でも喋ってもいい空間があればいいと感じた。特に子どもにとっては、静かにしなければいけないというストレスがあるので、喋ってもいい場所があれば利用しやすくなるのではないかと感じた。

野口委員長：今の意見に補足させていただくと、今の大学図書館はラーニングコモンズといって、学びを共有する場を作ろうというのが主流になっている。喋っているというのはその

ような空間でのことであり、それと同時に、静かな空間も提供することも同時に行っている。公共図書館でも、今は「にぎわい」といったことに注目しているので、喋れる空間やカフェを併設しよう等の流れがあるが、やはり静かな空間を提供することも同時に行うため、建物の構造的な問題が大きなポイントになる。音が反響するような建物では、喋ると他の場所まで声が響いてしまうといった問題が出てくるので、小田原市で取り組むのであれば、ある程度長期的に研究していく必要があるのではないか。

図書館長：飯村委員からのご意見について、我々も踏み込んでいくべきテーマと捉えている。取っ掛かりとして、今回の再開館にあたり、新たにティーンズのエリアを新設した。現在は、喋ってもいい場所として周知していないが、音を立ててはいけないという雰囲気若い世代を図書館から遠ざけているのであれば、少しずつ解消していければと考えている。今後は周りの環境に馴染んでいくかどうかバランスを取りながら取り組んでいきたいと考えている。

野口委員長：東口図書館では区切られた空間に学習室が設けられているが、防音なのか。

遠藤副館長：防音である。

野口委員長：学習の形態として、一人で黙々とではなく友達と話し合いながら何かをまとめるという形は今の学校教育でも重視されているため、そういう学びをしたいという生徒もいるかもしれない。そのような場合、うるさいからという理由ではなく、学びの形にあっていう理由で学習室に案内する方法もありかと思う。

図書館長：構造的に環境が整えられれば一番いいが、それだけではなく、図書館のルールについても考えていきたい。図書館が決めたものを守ってもらうだけではなく、様々な立場の利用者がお互いを容認しながら、ルールの落としどころを目指して作りあげられたら一番いいと思う。そのためにどのようなアプローチをしていけばよいかを研究し、図書館協議会の中でも意見をいただきながら進めていきたい。

野口委員長：音の問題については、子どもの声でさえうるさいという意見が寄せられる時代で、我々自身も敏感になっているところもあると感じている。もう少し寛容になるべきではないかという思いはある。音に関連した質問だが、中央図書館や東口図書館ではBGMは流しているか。

図書館長：今は流していない。

野口委員長：BGMに関する要望は寄せられることはあるか。ヒーリングミュージックを流している図書館が増えていて、その辺も合わせて研究してはどうか。

遠藤副館長：東口図書館は中央図書館よりカジュアルなイメージで、お喋りしてもいい空間にしたというコンセプトで進め、音楽も流せるように放送設備も設置しているが、現状ではそこまで至っていない。統括責任者にも現状を聞いているが、年配の方からBGMを流すのはいかがなものかという意見を寄せて来ているということがある。ただ、東口

図書館は一般と子どものエリアが半分で分かれているので、子どものエリアだけでも流したらどうかと話している。

野口委員長：それぞれ考え方は様々であると思うが、実証実験という形でBGMを流して意見をいただく期間を設けるのも一つの方法かと思う。

北河委員：本の福袋についての意見があったが、私の知人もとても良かったと言っていた。定期的に出されたら、ある程度の人数はそれを求めてくるのだと実感した。

図書館長：東口図書館での福袋の意見をいただいているが、中央でも12月にお楽しみ袋という形で毎年実施している。我々も本を選ぶ際には楽しんでやるようにしているし、実施すると多くの方が借りてくれるので、拡大しながら取り組んでいきたいと考えている。

（２） 中央図書館再開館における変更点について【資料２】

○事務局説明(資料に基づき図書館長より説明)

○質疑応答

大塚副委員長：西口から入ってすぐ右を見ると予約本コーナーの書棚があるが、ガラス張りなので本の裏側が見えていて気持ちのいいものではない。図書館に入ってすぐの雰囲気は大事なので、何か工夫をしてはどうか。

図書館長：我々も気にしているところである。先日、東海大学の学生に館内の掲示についてデザインをしてもらったが、予約本コーナーのガラス張り部分のデザインも考えてくれ、近々カッティングシートを用いた装飾をしてもらう予定である。

北河委員：協議会開催の前に館内を見させてもらったが、イスの置き方等が工夫されていてオープンな印象を受けた。

飯村委員：児童コーナーの企画本で「はる」の部分の図書があまりなかったが、ほとんど貸出されているのか。

図書館長：貸出されている状況であるが、面出しが若干迫り付いていない部分がある。

大塚副委員長：児童コーナーでの面出しは子どもの目につきやすくなるので非常に重要である。すぐに借りられるのであれば、事前に準備をしておき、借りられたらすぐに補充するぐらいの工夫は必要である。

図書館長：改めて注意しながら面出しをしていく。

馬見塚委員：料理や手芸に関する図書の配置を変えたのは貸出冊数が多いからなのか。

図書館長：このジャンルの図書は厚さが薄く、面出しをしないと借りづらいと考えたことと、手前に配置することでファミリー層や女性に図書館を活用してもらう狙いがある。

馬見塚委員：今回の配置換えは最終的に貸出冊数を増やすことを目的としているのか。

図書館長：貸出冊数を増やすこともそうだが、前段階として、様々な年齢層に馴染み深い図書館にしたいという思いがある。現在の利用者はシニア層が中心になりつつあるので、若

い世代へのアピールをしていくという観点を持って今回の配置換えを行った。

馬見塚委員：逆に奥まった場所に配置した方がいいと考えているジャンルはあるか。

図書館長：全集等の重めの図書については、奥まったところの方が落ち着くのではという感覚はある。

野村委員：企画本コーナーは目につきやすくていいと感じた。今回の利用者からの意見で、図書の消毒機についての意見があったが、それを逆手にとり、今後の企画本のテーマで除菌についての特集を組んでみるのも面白いのではないか。また、パソコンコーナーで電源供給をしているという話があったが、その他の場所では供給していないのか。

図書館長：コンセントの配置等の問題があり、現在はパソコンコーナーのみである。

野村委員：大学生ぐらいでしっかり調べ物をしようとする、参考図書コーナーでパソコンを開くことが多いので、電源があると助かるのではないかと感じた。

図書館長：その辺りは今後研究していきたい。

馬見塚委員：中央図書館の書架案内図で、ティーンズコーナー側の壁にドアの表記がいくつかあるが、ここからの出入りは出来るのか。

図書館長：元々は出入り出来るつくりになっているが、IC タグを感知する機械が正面と西口の入口にしかないことと、外に出て過ごしていただけるような整備は出来ていないため、現状では閉鎖している。

馬見塚委員：今朝もニュースで放送していたが、外にイスを持ち出してゆっくりくつろぐチェアリングが流行っているようなので、貸出処理をした後に外で読書をするのもいいかと思いい質問した。

図書館長：実現することが難しい点もあるが、何が出来るかを引き続き研究していきたい。

武田委員：館内の掲示物で、雑誌スポンサー募集というのが目に入ったが、現在の雑誌スポンサーは何誌あるのか。

図書館長：現在は2誌である。以前から雑誌スポンサー制度を導入しているが、雑誌スポンサーになるとどのような効果があるのか等の周知方法を考えなくてはいけないと感じている。

武田委員：雑誌が配架されている場所にスポンサー名が表示されているのか。

図書館長：雑誌コーナーにスポンサー名を記載している。

野口委員長：現在は2誌ということだが、今まではどうだったのか。

野村副館長：そのぐらいの冊数で推移している。

野口委員長：図書館で雑誌スポンサー制度を導入していることを市内の会社は知らないのではないかと。知っていれば募集してくる会社も増える可能性があるのではないかと。

図書館長：スポンサー側からすると、図書館に大勢の利用者が来ていればPR 効果があると判断し、応募してくれる可能性があると思う。そのような意味でも様々な年齢層の方に図

書館を利用していただく方法を考えるのと同時に、スポンサー制度の周知の方法も含めて研究していきたい。

(3) 第二次小田原市子ども読書活動推進計画における施策の実施状況報告について

【資料3】

○事務局説明(資料に基づき図書館長より説明)

○質疑応答

北河委員：学校司書は司書資格を持っている方と持っていない方を同じ条件で採用していると聞いている。知人の司書の話だと、学校の図書室もきちんと整備をしなければ効果が無いが、何も知らない方が膨大な図書を管理するのは難しい。それでも教育委員会は司書資格のない方も採用しているため、学校による格差はあると言っているが、このことについてはどのように考えているか。

図書館長：教育委員会で司書の配備を進めているが、1人の司書が複数の学校を担当している場合もあると聞いている。ただ、具体的なところは捉えられていないため、学校図書館の状況を聞きながら、公共図書館として何ができるのか、どのような形で連携出来るのかを研究していきたい。

北河委員：学校の図書室が充実していると読書に興味を持つ児童が増えるのではないかと。そうになると公共図書館に足を運ぶ可能性も大きいと思えるし、読書率も上がると考えられるので、司書資格を持った方を配置することは大切だと感じている。

野口委員長：司書資格を持っているかどうかに加えて、採用された後の研修体制も重要である。現在の研修の仕組みについては把握しているか。

図書館長：学校図書館協議会という団体があるので、その中で協議会としての研修活動なり自主活動を行っていると思われるが具体的には把握していない。

野口委員長：第三次計画を策定する中で、司書研修の際に図書館からも出席し、図書館からの情報を届ける等の仕組みを構築して連携を図っていくことも良いのではないかと。

図書館長：学校図書館との連携は第三次計画の1つのポイントになると考えており、連携の手法については引き続き研究していく。学校司書の関係で事例を紹介させていただく。先日、近隣にある西湘高校を訪ね、高校の図書室の様子を見させてもらったが、非常に素晴らしい図書室だった。学校司書が積極的に図書室を運営しており、クラスからの図書委員も積極的に関わっていた。今までは、高校の図書室との連携についての視点は無かったが、今後は様々な形で連携が出来ればと考えている。また、臨時休館中に、西湘高校の生徒に中央図書館に来てもらい、どんなところがあればいいか意見を聞いた。第三次計画にそのような要素も入れ込めればいいと考えている。

野口委員長：以前、第二次計画策定の際に意見をさせていただいたことだが、ティーンズ世代の読書推進は中学生・高校生が対象になると思う。県立高校に対しては、小田原市が直接運営していないので数値目標を設定することは馴染まないにしても、県立高校の生徒と一緒にティーンズ世代の読書の推進を図っていこうという視点を入れ込むのは大切なので、そのような視点は入れ込んでいただきたい。それと関連して、幼稚園・保育園に関しては、私立との連携についても計画の中には入れていただけたらと思う。連携の視点としては、市の施設である公立と連携するのは当然だが、私立とも連携していくという姿勢を打ち出してほしい。

図書館長：幼稚園・保育園は私立の割合が多いため、そちらにも意識を向けないと行き届いた計画にならないと考えているので、今後研究していきたい。

馬見塚委員：こんにちは赤ちゃん事業でのブックリスト配布はいいと思うが、以前小田原市でも行っていたブックスタートは再開する予定はないのか。

図書館長：実施していた当時は図書館ではなく、子育て政策課が実施していた。背景として、子育て世帯向けのサービスと同時に、読み聞かせへの関心の底上げになるような事業ということで本の配布をしていた。他の市町村では継続しているところもあるが、小田原市では一定の役割を終えたと判断して終了している。現在は、相当数の方が読み聞かせをするということに意識を向けていると感じているが、その中で今後図書館としてできること、行うべきことは何かを研究していく必要がある。

馬見塚委員：公立保育園にライブラリーが設置されていて、保護者に貸出をしているとのことだが、全ての園に設置されているのか。

図書館長：全ての園ではないかもしれないが、入り口付近に小さな本棚を用意し、子どもの送り迎えの際に貸出が出来るコーナーを設けている。

馬見塚委員：公立保育園・幼稚園の主な取組で、絵本の読み聞かせについて記載されている。読み聞かせは日常的に行っていると思うが、あえて記載されているのは今までよりも推進したということなのか。

図書館長：計画の中で位置付いている事業としては、日常的に行っていることも含めているので記載している。

馬見塚委員：絵本と絵のない本は大きなギャップがある。絵本の読み聞かせをしているからと言って、自分で本を読むようになるかは必ずしもそうではない。絵本と絵のない本は全く別のものなので、絵本というよりは物語に小さいころからたくさん触れてもらうよう総合的に考えた方がいいのではないか。読み聞かせに限定せず、紙芝居、パネルシアター、人形劇等で総合的に発信していくことも考えてはどうか。

大塚副委員長：今は解散してしまっているが、学校図書ボランティア連絡会の代表として話をさせていただきたい。現在の学校ボランティアは、絵本の読み聞かせだけではなく紙芝

居やパネルシアター等の分野で日常努力をして各小学校に展開しているが、あまり認識されていないのが現状だが、絵本の読み聞かせしかしていないと思われるのは心外である。そういうところにスポットを当て、学校ボランティアの方も読書推進の一端を担っていると思える計画にしてもらえればありがたい。

野口委員長：ボランティアの活動を見える化していくには、組織力が重要だと思う。それぞれの学校での活動を一か所に集約して共有出来るような仕組みがあると良いのではないかな。

図書館長：学校図書ボランティアは学校毎に活動されているものなのか。

大塚副委員長：元々は地域単位で結成されたグループがいくつかあった。15 年程前に小田原市が地域や保護者に学校ボランティアに関わってもらおうと募集をかけ、ほとんどの学校に学校ボランティアが入って活発になった。その前からやっていたグループが中心になって連絡会を発足させ、勉強会を年に 2 回行っていた。

野口委員長：連絡会は自主的に発足させたとのことだが、解散したのはメンバーの入れ替わり等の事情で維持が難しくなったということか。

大塚副委員長：立ち上げのメンバーの高齢化もあり、組織全体の維持が困難になった。また、学校司書が配置されるようになり、学校ボランティアが不要になったと考え、やめてしまった学校もある。

野口委員長：今までの連絡会といった組織は無理でも、年に 1 回中央図書館等で連絡交流の場という形で呼びかけて参加したい方に参加してもらう機会があってもいいのではないかな。そうすることで図書館としても学校ボランティアの実情がつかめるのではないかな。

大塚副委員長：勉強会を開催していた時は図書館に場所を提供してもらい、講演会等を開催した時は、特別に県の合同庁舎の 1 室を借りたりしていたが、図書館との連携という点では全く無かったと感じている。

図書館長：連絡会が解散した後は、技術を伝えるとか、みんなで勉強しあうといった流れが失われている状況かと思うが、今後、どのような形を取れるかを考えていく必要がある。

北河委員：私自身、図書の読み聞かせボランティアを 10 数年行っている。以前は連絡会が機能していたため活気があったが、連絡会が解散した後はボランティアがばらばらになってしまい、後進を育てることが無くなってしまった。今の保護者は働いていることが多く、呼びかけても、やってみたいけど時間が無いからと言われる。学校側は学校ボランティアに期待しているので、責任感が強い方は辞められなくなっている状況である。そのため、学校ボランティアが今後どうなっていくのか不安に感じている。

飯村委員：子どもを私立保育園に通わせていたが、公立保育園での活動内容は知らなかった。通わせていた園にはこのような本棚は無く、各クラスに少しの絵本がある程度だったの

で、幼稚園・保育園の時から本に興味を持ってもらえるように私立でもこのような取組があればいいと感じた。また、学校の図書室で人気のある本をアンケート等で把握し、その本を図書館でも前面に出し、子どもの目につきやすくすることも良いのではないか。

野村副館長：飯村委員の立場から見て、ボランティアについてはどのようなお考えをお持ちなのか。

飯村委員：子どもの小学校では、年度初めにボランティア一覧表が保護者に配布されるが、活動時間が朝の早い時間帯が多いのに対し、仕事をしている保護者が多いため、特定の方のみで運営され、新しい方が出てこないというのが現状である。新しい方を増やさなければと考えてはいるが、なかなか難しい状況だと感じている。

武田委員：読み聞かせのボランティアは基本的には児童の親だけなのか。シニア層等、地元の方にはなれないのか。

大塚副委員長：児童の親だけということはない。学校側が地域の自治会等をお願いしている場合もある。

野口委員長：例えば、図書館で読書ボランティア養成講座等を開催して、終了した方には身近なグループに所属して活躍していただくという仕組があってもいいのではないか。

武田委員：図書館には大勢のシニア層が来館されているので、社会的活動を行いたいという潜在的な需要もあるのではないか。

大塚副委員長：生涯学習課で15年程前にシルバー大学のようなものを開催していた中に、読み聞かせボランティア養成講座のようなものがあって、そこを卒業された方が各地域に散らばって活動している。その方が呼び水になって、地域のシニア層の参加を促している例もある。

遠藤副館長：読み聞かせボランティア養成講座については、第1次計画の中に記載があり、図書館でも年1回行っていた時期がある。講師は市内の読み聞かせボランティアの会の方に努めてもらい、終了した方はその団体に所属してもらって活動してもらっていた。ただ、ボランティアの方でも、毎年となってくるとだんだん難しくなり、現在は途絶えている。ただ、途絶えてからかなりの期間が経過しているので、再開を検討する余地はあると考えている。

図書館長：ボランティアをやりたいと思っている人がいる一方で、それが義務になってしまうと難しくなるということがあるのではないか。その辺りのバランスを取れる方策を考える必要があると感じている。

大塚副委員長：学校司書と読み聞かせボランティアが研修を合同でやったりするのもいいし、あるいは司書が講師となり、ボランティアが学ぶということでも連携になるのではないか。そのような研修を年に1回でも2回でも図書館で開催していただけるとありがたい。

野村委員：図書館は本を収蔵するだけではなく、ボランティアを含めた関係各課と連携した取組

を行い、市民とのつながりを構築していく必要があると感じた。第2次計画の数値目標は図書館だけでは達成できないものが多く見られたので、改めて連携が必要だと感じた。

図書館長：第三次計画を策定するにあたり、連携・相談は強化しないといけないと考えている。

野口委員長：数値目標の達成状況で令和3年度のアンケートのデータを紹介してもらっているが、単純に達成出来なかったということではなく、コロナ禍でのデータであることを差し引いて考える必要がある。今後、アンケート結果を外部に公表する際には、注意書きでコロナ禍のデータである旨を記載したほうがよい。

図書館長：各委員からいただいたご意見を参考に第三次計画の策定を進めていく。

3 その他

○事務局説明（小野主査）

- ・次回の協議会は6月頃開催予定。
- ・後日、本日の議事録の確認をお願いする。

野口委員長：第6回の図書館協議会を終了する。